

古代史シリーズ7

「秦氏と渡来人」



本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

日本の施政や文化に多大な影響を与えた渡来人。

最も大きな影響を与えた秦氏を中心に漢氏、文氏、紀氏など主要な渡来人が残した実績と大王家との関係を記紀に記述される事績から把握していきます。

著者：情報戦略モデル研究所

井上 正和

はじめに

本冊子は、筆者が古代史セミナーを実施している中で、講義録を製本化したものです。

筆者は、以前「コメーカ」のSEやコンサルタントが専門でした。十年ほど前から大学での講義をきっかけに古代の文化や歴史に興味湧き、古代史のテキストを作り講義するようになりました。

元々、素人が古代史セミナーのテキストを作る訳ですから、古事記や日本書紀（以降は「記紀」という）が読めなかったり、古代史は良く分らないと思われる初心者の方々が持たれる感覚が同様に疑問になりました。

当該古代史セミナーが以外に人気があるのは、素人の視点で不明点を解説することにあるのかもしれませんが、体系化されていて分かり易いとお褒めをいただきますが、元SEとしてシステム設計やプロジェクトマネジメントで体系化することが性癖になっていることが寄与しているのかもしれませんが。

古代史シリーズ7「秦氏と渡来人」では、秦氏と渡来人の由来と実績を天皇家との関りから整理して行く講座です。代表的な渡来人と言え、秦氏、漢氏、文氏です。日本の文明・文化の形成に多大な痕跡を残しています。軍事の漢氏、文書行政能力を発揮した文氏、最も大きな集団を擁して日本の産業や宗教基盤を想像した秦氏がいます。この秦氏は天皇家への忠誠のもとに巨大集団となりますが、権力を目指すこともなく、専門職人集団として文明・文化を創り上げます。そして平安時代以降、日本人になるために渡来人の痕跡すら消し去っていきます。謎の渡来人と言われる所以です。

本冊子は、記紀を読み解くために、参考図書を主体的に活用し記紀で裏付けをする形で進みます。図柄はウキペディアからかなり引用しています。活用しました主要参考図書は次の通りです。

- ＋「日本書紀」（宇治谷 孟著、講談社）
- ＋「古事記」（竹田恒泰著、学研）
- ＋「秦氏とその民」 加藤謙吉著（白水社）
- ＋「渡来氏族の謎」 加藤謙吉著（祥伝社新書）
- ＋「謎の渡来人」 水谷千秋著（文芸春秋）
- ＋「日本の神社 伏見稲荷大社」（デアゴスティーニ）
- ＋「広隆寺」広隆寺発行（便利堂）

十「日本の神社 松尾大社」(デアゴスティーニ発行) など
本冊子の古代史シリーズ7「秦氏と渡来人」の全体構成は次の目次にあげて置きます。

古代史シリーズ7 「秦氏と渡来人」の目次 ◎

第一章 「渡来人とその時代背景」 渡来人増大の時代的背景と氏姓制度の変遷を捉える。	5
第二章 「東漢氏と西文氏」 秦氏に次ぐ渡来人の漢氏とフミヒト(文)氏の素性と活動の実績を知る。	14
第三章 「秦氏の組織化」 巨大組織である秦氏等の集団特性と組織化の経緯をたどり、 天皇家との関係を捉えます。	28
第四章 「秦氏の生産活動」 秦氏が伝えた幅広い技術や文化について整理する。	38
第五章 「山背の秦氏」 最盛期を築く山背の秦氏の隆盛の経緯と背景を知る。	50
おわりに	62

◆第一章 「渡来人とその時代背景」の目次

第一話 渡来人のうねりと時代背景	6
第二話 氏姓制度の変遷	10
コラム.. 「ワカタケルと倭の五王」	13

第一話 渡来人のうねりと時代背景

日本は島国であったことから日本人の祖先は皆渡来人であると考えられます。縄文時代、弥生時代、そして古墳時代、奈良時代と文化の変化が急激であるところを見ると、異なった文化を持つ多くの渡来人がやって来たと考えられます。記紀で渡来人として明記するのは第十五代応神天皇紀からになります。四世紀以降になりますが、渡来人の大きな移住時期にうねりがあります。

参照資料1-1:高句麗の南下



出典: 国語ユニバーサル新歴史資料

参照資料1-2:朝鮮後三国時代
勢力図と年譜

676年に新羅によって朝鮮半島初の統一がなされますが、8世紀末から9世紀末まで王位継承の争いが起こり、地方でも農民が反乱を起したり、飢饉に見舞われたりと新羅は国力を失っていきます。そんな中、有力な豪族たちが新羅を分裂させ国を建国していきました。後三国時代といわれる時代です。

後百済

新羅

後三国時代

出典: ウィキペディアから原図引用



一回目は、四紀末から五世紀の初頭です。倭が百済を支援し、新羅支援で南下した高句麗好太王と激突した時期であり記紀では、応神天皇期に当たる。朝鮮半島では、紀元前後頃に勃興した高句麗が南進策をとり、四世紀初頭には中国の直轄地である楽浪・帯方二郡を滅ぼす。この侵略で、三世紀の南朝鮮で馬韓・辰韓・弁韓の三地域で小国群を形成していた韓

の時期も朝鮮半島の動乱の時期と重なるのです(参照資料1-1)。

参照資料1-3:高句麗と朝鮮、倭の年譜

中国	朝鮮半島	倭・大和
200年 (三国志時代)	209年 高句麗、丸都を都にする 204-238年公孫氏帯方郡支配 (三韓時代:馬韓・弁韓・辰韓)	239年 卑弥呼、魏へ朝貢親魏倭王金印
265年 晋(司馬炎)	286年 高句麗、帯方郡を奪う	265年 高麗、西晋へ朝貢
317年 東晋	(三国時代:百濟・新羅・伽耶) 391-412年 高句麗南下(好太王)	369年 任那を支配
420年 南宋、北魏	427年 高句麗平壤遷都	478年 倭武帝、宋に遣使
581年 隋王朝	562年 新羅、任那併合	562年 任那の日本府滅ぶ
618年 唐王朝	668年 高句麗滅亡 675年 新羅、百濟を併合	663年 白村江の戦いで敗戦

族は、四世紀中ごろ、馬韓から伯濟国(はくさいこく:百濟)、辰韓から斯盧国(しろこく:新羅)が興り、周辺諸国を統一する。朝鮮半島南部の弁韓だけは小国分立の状況が続く、伽耶(伽羅)と呼ばれるようになる。倭国は、四世紀後半から伽耶の地の任那を支配し、朝鮮半島に積極的に介入するようになる(参照資料1-3)。

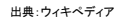
二回目は、五世紀後半から六世紀初頭で、四五七年、百濟の王都漢城(現、ソウル)を襲った高句麗の長寿王(ちようじゅおう)が百濟の蓋鹵王(がいろ)を殺害し、領土の大半を奪い取る。百濟は倭の力を借りて国の再興を図る。記紀では、雄略紀七年条に百濟から「今来才伎(いまきのてひと)」が献上されたとある。「今来」は五世紀以降の新参渡来人、「才伎」は手人(てひと)と言い、技術者・工人を意味する。ちなみに、五世紀以前の渡来人は「旧」で応神紀までの渡来人に相当する。倭の五王時代である。渡来人の増大と活用が広がり朝廷直轄の集団に編成替えされる。

三回目は七世紀後半で、百濟は唐と新羅の連合軍の攻撃を受け滅亡する。倭も救援するが白村江の戦い(六六三年)で惨敗する。天智天皇期に当たる。六六八年には、唐・新羅の連合軍により高句麗が滅ぼされる。中国系が半数を占めるが、朝鮮半島の覇権争いと国家の没落は日本への移民となつて現れる。このように大陸を背景とした朝鮮半島での覇権争いは、安定した倭国を求めて多くの移動の民を生じさせることになった。このようにして日本にきた渡来人たちは各豪族に帰属していく。

弘仁六年(八一五年)成立の住所録である『新撰姓氏録(しんせんしやうじろく)』には、平安京と畿内五ヶ国居住の一一八二氏族の本系(系譜記録)を掲げる。その内、渡来系諸蕃は三二六氏ある。諸蕃三二六氏の内訳は、漢(中国)一六三氏、百濟一〇四氏、高麗(ま、高句麗)四一氏、新羅九氏、任那九氏である。中国系が半数を占めるが、大半は出自を二次的に中国系に改めたものである。

応神天皇期から始まる四、五世紀の渡来人は、渡来系遺物から、伽耶(かや)系で占められ、移住先は畿内や西日本の

大和の豪族たち



二月条には加羅に抑留されていた戸月氏（百濟）支配下の

人夫百二十県を召喚するために葛城襲津彦が派遣された。『姓氏録』には、秦忌寸(はたいみき)の本系は、山背の秦氏の一部が葛城氏配下の掖上の地に置かれ、その後、山背へ移住した。

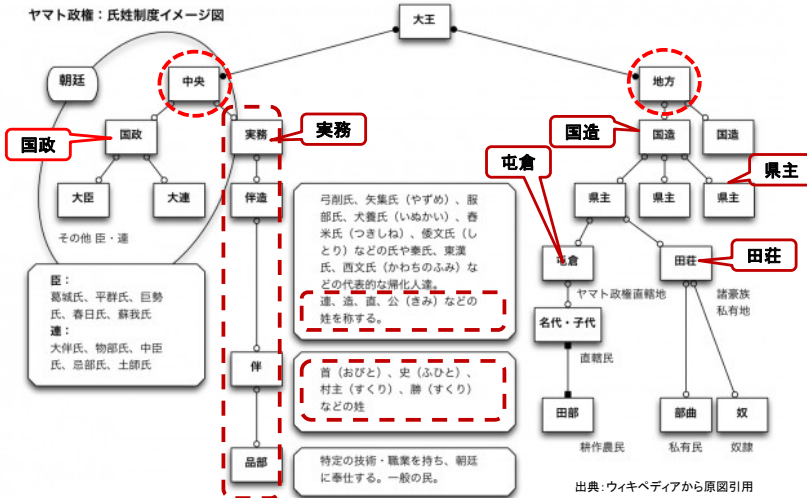
第二十一代雄略天皇「獲加多支鹵(ワカタケル)大王」期になると、渡来人の組織化が行われる。稻荷山古墳出土の鉄剣銘や江田船山古墳出土の太刀銘に「獲加多支鹵大王」と刻まれた天皇で、「治天下(あめのしたしらしめす)大王」と大王を名乗った最初の王であり、この時期は五世紀後半と想定される。雄略天皇は宋の順帝へ上表文を書き、使者を送り、「武(雄略天皇のこと)」は順帝から朝鮮半島を支配下とする安東大將軍に任命された。倭の五王時代で最も実力が認められた天皇であり、渡来人も多く雄略天皇を支えた。王権強化に向けて軍事力を強化するため、即位後、豪族の伴氏や物部氏を伴造(ともぞう)とし、大王の私兵を直属の軍事組織に編成する。「伴(とも)」は友・供と同音でヤマト王権の長である大王に奉仕する意味があり、「造(ぞう)」は集団の長としての意味があつた。雄略天皇は当時の二大豪族である葛城と吉備を天皇家に隷属させ、統合する。雄略三年条、第二十代安康天皇(二十代)を暗殺した眉輪王(まゆわおう)と眉輪王を置った葛城の円大臣(まどかのおおみ)を共々焼き殺し、葛城氏を滅亡させる。また、雄略紀七年条では天王家を少女や小さい鶏に見立て大きい女や鶏と戦わせ楽しんでたのを、大王家を軽んじたとして備中の吉備下道臣前津屋(きびのしもつみちのおみさきつや)を誅殺、備前の吉備上道臣田狭(きびのかみつみちのおみたさ)を反乱の門で退ける。天皇継承を企んだ星川皇子を焼き殺し、支援した吉備上道臣から砂鉄の産地「山辺」を没収する。葛城氏と吉備氏の在地勢力が相次いで大和朝廷に屈服した事実を伝えている。これらの二大豪族に所有されていた渡来人を含め大権の強化に向けて渡来人組織の改革を行う。多数の「今来(いまき)」の渡来人は地方に分散居住せず、王権の意向により河内や大和に住まわされる。そして、地方の首長族に帰属していた旧の渡来人も、次第に王権が及ぶようになる。

五世紀末から六世紀初頭に「ウヂ(氏)」の組織が成立する。ウヂは、外形的には共通の祖先だが、実際は親族関係は疑いのであった。ウヂの名は事象ではなく、奉仕の在り方や職掌に応じて王権より付与された。王権への隷属奉仕を前提として形成された政治組織であった。「カバネ(姓)」はウヂの性格にもとづき、身分標識である「カバネ(姓)」が与えられ、氏姓制度(うじかばねせいど)によって王権の政治体制を刷新したことになる。

第二話 氏姓制度の変遷

氏姓（うじかばね）制度とは、大和王権において、

参照資料1-5-①:氏姓制度による支配構造



大王(天皇)から有力な氏族に与えられた王権との関係・地位を示す称号である。その成立時期は、五〜六世紀を遡ることはありません。大和政権に対抗する力を持っていた葛城氏や吉備氏が滅ぼされたり服従させられて天皇家の権威を確立したのが、五〜六世紀ということになります。その集団の性格や職業から与えられる氏と氏単位に地位を表す姓が与えられる制度です。氏姓制度はその明示的な制度です。氏姓制度の変遷を見ていきましょう(参照資料1-5-①)。

日本書紀に記述される氏姓制度の始まりは第十三代成務務天皇期です。最初にカバネを制度化し、国・郡に造長(みやつこおさ)、県邑(あがたむら)に稲置(いなぎ)を置き、盾矛を賜い印としたとある。

その後、具体的に臣連制(おみむらじせい)を作り、氏姓制度が成り立つのは第十九代允恭(インギョウ)天皇期です。臣連制が導入され、公・君(きみ)、臣(おみ)、連(むらじ)、直(あたい)、首(おびと)、史(ふひと)、村主(すぐり)などが定められた。この改革により以前の国造・県主はアタイ(直)姓になりました(参照資料1-5-①)。

氏姓制度による支配構造を参照資料から要約しておきましょう。大王(天皇)のもとに、中央(朝廷)と地方に分かれます。中央では国政に当たる臣・連の氏族と実務を行う氏族に分かれます。現代の政治家と官僚ですね。

大臣(おおおみ)に任命されるのは一人です。姓(かばね)の一つである臣(おみ)の有力者が就任した。最初の大臣と言われるのが、武内宿禰(たけうちのみこと)。そこから、葛城氏→平群氏→巨勢氏→蘇我氏と大臣が変わっていきます。葛城氏が失脚したら平群(へぐり)氏が任命され、平群氏が失脚したら巨勢(こせ)氏が任命されて…という感じ

参照資料1-5-②:「氏姓制度」

1. 5世紀頃:臣連制-成務天皇(13代)、允恭天皇(19代)

出典:ウィキペディア

臣(おみ)

葛城氏、平群氏、巨勢氏、春日氏、蘇我氏のように、ヤマト(奈良盆地周辺)の地名を氏の名とし、かつは大王家と並ぶ立場にあり、ヤマト王権においても最高の地位を占めた豪族である。

連(むらじ)

大伴氏、物部氏、中臣氏、忌部氏、土師氏のように、ヤマト王権での職務を氏の名とし、大王家に従属する官人としての立場にあり、ヤマト王権の成立に重要な役割をはたした豪族である。

伴造(とものみやつこ)

連とも重なり合うが、おもにそのもとでヤマト王権の各部司を分掌した豪族である。
弓削氏、矢集氏(やずめ)、服部氏、犬養氏(いぬかい)、春米氏(つしみね)、倭文氏(しとり)などの氏や秦氏、東漢氏、西文氏(かわちのふみ)などの代表的な帰化人達に与えられた氏がある。
連、造(みやつこ)、直(あたい)、公(きみ)などの姓を稱した。

百八十部(ももあまりやのとも)

さらにその下位にあり、部(べ)を直接に指揮する多くの伴(とも)をさす。
首(おびと)、史(ふひと)、村主(すくり)、勝(すぐり)などの姓(カバネ)を稱した。

国造(くにのみやつこ)

代表的な地方豪族をさし、一面ではヤマト王権の地方官に組みこまれ、また在地の部族を率いる地方的伴連の地位にある者もあった。
国造には、君(きみ)、直(あたい)の姓が多く、中には臣(おみ)を称するものもあった。

県主(あがたぬし)

これより古く、かつ小範囲の族長をさすものと思われる。いずれも地名を氏の名とする。
このように、氏姓制度とは、連-伴造-伴(百八十部)という、大王のもとでヤマト王権を構成し、職務を分掌し世襲する、いわゆる「負名氏」(なおいのうじ)を主体として生まれた。そののち、臣のように、元々は大王とならぶ地位にあった豪族にも及んだ。

2. 八色の姓(7世紀頃):天武天皇(40代)

◆684年(天武天皇13年)に、「八色の姓」が制定された。

その目的は、上位の4姓、つまり真人、朝臣、宿禰、忌寸を定めることである。

◆真人は、継体天皇より数えて5世以内の世代の氏に与えられたといわれ、

皇子・諸王につく皇親氏族を特定したので、飛鳥浄御原令で官位を皇子・諸王と貴族(諸臣)とで区別したと共通する。

◆したがって、貴族の姓としては、朝臣、宿禰、忌寸の3つである。

その間にさらに氏族の再編が進められ、朝臣52氏、宿禰50氏、忌寸11氏に収められた。

◆大宝令(701年)で、貴族の三位以上と四、五位の官位にともなう特権が明確にされた。

これに対応する氏姓も一応完成された。
地方豪族についても、702年(大宝2年)、諸国国造の氏姓を政府に登録することによって、中央豪族と同様の対応がなされたものとされる。

出典:ウィキペディア

人々(友・朋(とも))をも意味した。造(みやつこ)も本来は大王の身内的な従者、御家(みやつ子)をさしたが、身分差が生じて、伴造は「伴」集団を統率・管掌する首長クラスを言うようになった。東漢氏(やまとあのみ)や西文氏(かわちのふみ)し、秦氏などはこの地位に配置された。伴は百八十部(ももあまりやのとも)と言われ、その姓には首(おびと)、史(ふひと)、村主(すくり)、勝(すぐり)などの姓(カバネ)を称した。品部は特定の技術・職業を持ち、朝廷に奉仕する一般の民である。

一方、地方の支配構造は、国造(くにのみやつこ)を筆頭に県主(あがたぬし)が配置され、県主は朝廷直轄地の屯倉、直轄民の名代・子代(なしろ・こしろ)、耕作農民の田部(たべ)を下位に置いた参照資料1-①①。また諸豪族の私有地は田莊(たどころ)といい、その耕作は、

です。乙巳(いつし)の変で蘇我氏が滅ぼされたのを機に、大臣(おおおみ)ではなく、左大臣・右大臣を置くようになりました。

姓(かばね)の一つである連(むらじ)の中でも軍事を司る伴造出身の有力氏族である大伴氏と物部氏が大連となった。大連の方は一人ではなく、大伴氏と物部氏が同時に任命されています。物部氏の物部尾興(もののおこし)の時、大伴金村が失脚してからは、物部氏のみが大連を務めました。物部守屋が蘇我氏に滅ぼされたのを機に、大連制は廃止されています。

実務の氏族は、伴造(ともぞう)、伴(とも)、品部(しなべ)の序列で構成されました。この実務の上位にある伴造は、大王王権のもとで世襲的職掌をもつて奉仕する「伴(とも)」集団を管掌する中央の首長をいう。その多くは中・下級の首長で、姓(かばね)は連(むらじ)、造(みやつこ)、公(きみ)などが中心を占める。伴は大王の従者(供(とも))であり、それら一団の人々(友・朋(とも))をも意味した。造(みやつこ)も本来は大王の身内的な従者、御家(みやつ子)をさしたが、身分差が生じて、伴造は「伴」集団を統率・管掌する首長クラスを言うようになった。東漢氏(やまとあのみ)や西文氏(かわちのふみ)し、秦氏などはこの地位に配置された。伴は百八十部(ももあまりやのとも)と言われ、その姓には首(おびと)、史(ふひと)、村主(すくり)、勝(すぐり)などの姓(カバネ)を称した。品部は特定の技術・職業を持ち、朝廷に奉仕する一般の民である。

参照資料1-6:忌寸賜姓氏族の改正過程（八色の姓）

氏族	天武10年	天武11年	天武12年	天武14年
草香部吉士 (くさかべのきし)	草香部吉士大形 ↓難波連		草香部吉士 ↓連	難波連 ↓忌寸
東漢直 (やまとあ いのあた い)	田井直吉麻呂 (たいの あたによしまろ)	倭漢直↓連 (やまとあや のあた)	倭漢連↓忌寸	
書直智徳 (ふみの あたによしまろ)	連			
坂上直熊毛 (さかのうえ のあたにくまげ)				
秦造 (はたみ やっこ)		秦造↓連	秦造↓連	秦連↓忌寸
西文音 (かわちの ふみのおび と)		文音↓連	書連↓忌寸	
西漢直 (あやのあた い)		川内漢直↓連	河内漢連 ↓忌寸	

出典: ウィキペディア

豪族の私有民である奴隸の奴婢(ぬひ)と私有民の部曲(かきべ)の労働力によって行われた。国造は、代表的な地方豪族をさし、一面ではヤマト王権の地方官に組みこまれ、また在地の部民を率いる地方的伴造の地位にある者もあつた(参照資料1-5②)。国造には、君(きみ)、直(あた)の姓が多く、中には臣(おみ)を称するものもあつた。

県主は、国造より古く、かつ小範囲の族長を指すものと思われる。いずれも地名を氏の名とする。このように、氏姓制度とは、連(伴造)・伴(百八十部)という、大王のもとでヤマト王権を構成し、職務を分掌し世襲する、いわゆる「負名氏」(なおいのうじ)を主体として生まれた。そののち、臣のように、元々は大王とならぶ地位にあつた豪族にも及んだ。

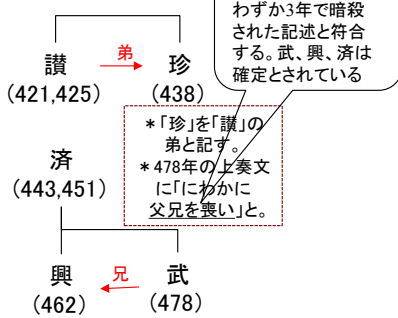
どの上位の姓が与えられて、従来の氏族秩序にとらわれない人材登用が図られた。参照資料1-6をみると有力氏族である東漢氏、秦氏、西文氏は天武十四年に「連」から「忌寸」姓を与えられている。しかしながら、奈良時代を過ぎる頃には、ほとんどの有力氏族の姓が朝臣になつてしまい、八色の姓も形式的なものとなつてしまった。

第四十代天武天皇期に、地位の象徴である姓を大きく変更します。八色の姓(やくさのかばね)の制度です(参照資料1-7②)。姓の制度は、壬申の乱(六七二年)の後、天武天皇が壬申(じんしん)の乱の貢献に対する報奨のために制定した八色の姓によつて有名無実化してしまいます。八色の姓の制で与えられた姓は、上から、真人(まひと)・朝臣(あそみ)・宿禰(すくね)・忌寸(いみき)・道師(みちのし)・臣・連・稻置(いなぎ)と定められた。貢献度に応じて実際に与えられたのは、上位四姓とされる。この制によれば、それまで上位の姓とされた臣・連は序列の六、七番目に位置付けられ、その地位は低下している。代わつて、天皇の忠誠心がある有能な者には、新たに作られた真人・朝臣・宿禰な

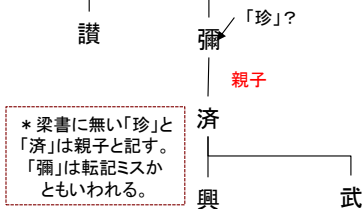
参照資料1-7:倭の五王

出典:ウィキペディア

『宋書』倭国伝



『梁書』倭伝



コラム:「ワカタケルと倭の五王」

中国史上で建業(現在の南京市)に都を置いた中国六朝(呉、晋、宋、齊、梁、陳)の第三王朝である宋帝国の正史『宋書』(五一三年ごろ完成)には、宋代(四二〇-四七九)を通じて倭の五王の遣宋使が貢物を持って参上し、宋の冊封体制(さくほうたいせい)下に入つて官爵を求めたことが記されている。四世紀後半以降獲得した半島における權益に関して国際的承認を得ることも遣宋使の重要な目的であつた。当時、倭の五王が宋に使節を派遣したのは、宋が倭王の権威の保障となる存在であつたからである。倭王たちは宋帝に半島南部の軍事的支配権を承認してくれるよう繰り返し上申し、最終的には「使持節 都督 倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事 安東大将军 倭王」授与され、新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓の統治についての公認を得た。この「安東大将军 倭王」を得たのは二十一代の雄略天皇が四七八年、宋書の倭王武(雄略天皇といわれる)の上表文を上申した後に獲得したものとされている。この時代は倭国が積極的に朝鮮半島に進出し軍事的に強固な国家であり宗帝国からも一目置かれていた。『宋書』倭国伝に見える倭人で宋帝に朝貢を贈つたことが確定であるのが五王(済・珍・済・興・武)である。この五王を宋書と記紀との対比によつて該当天皇の比定が行われてきた。宗国と梁国の正書である『宋書』と『梁書』の倭国伝に遣使の時期と倭王の続柄が記述されている。宋書では「興」は「武」の兄であり、「済」は「興」・「武」の親である。梁書は「彌」は「済」の親であると記述するが、「弥(珍の俗字)」を弥(彌の俗字)に転記ミスしたと考えられて、「彌」は宋書の「珍」と見なされている。また、四七八年に雄略天皇「武」が奉つた上表文に「にはかに父兄をうしなひ」(奄喪父兄)の文章から済(允恭天皇)・興(安康天皇)・武(雄略天皇)が確定した。記紀に急死した允恭天皇のその三年後、兄の安康天皇が暗殺されたことが記述されているからである。済・珍に関しては、

『梁書』にあるように珍を済の親とみれば、仁徳天皇になるが、両書の関係図のように兄弟がいらない。允恭天皇の兄弟の履中天皇、反正天皇、親の仁徳天皇のいずれかであるが、現在も論争中の事項である。

以降省略

参考図書

- 十「日本書紀」(宇治谷 孟著、講談社)
- 十「古事記」(竹田恒泰著、学研)
- 十「秦氏とその民」 加藤謙吉著(白水社)
- 十「渡来氏族の謎」 加藤謙吉著(祥伝社新書)
- 十「謎の渡来人」 水谷千秋著(文芸春秋)
- 十「日本の神社 伏見稻荷大社」(デアゴスティーニ)
- 十「広隆寺」広隆寺発行(便利堂)
- 十「日本の神社 松尾大社」(デアゴスティーニ発行)

おわりに

日本史における渡来人として代表的な「秦氏(はたし)」、「漢氏(あやし)」、「文氏(ふみし)」を調べて感じますのは日本の文明や文化かなり多くが彼らが先導することによって創られたということです。日本は島国であることから、元々渡来人によつて成り立った国であることは理解できます。日本の歴史上の文明や文化の変更点を見る時、渡来人が時代のパラダイムシフトを作ったことが分かります。

日本書紀では、最初の渡来人は第十五代応神天皇紀の弓月君(ゆづきのきみ)の大量渡来から始まりますが、日本の歴史全体を通してみると、文明と文化に大きな変化を与えた非連続な流れを捉えることができます。それは、一万年以上続いた縄文時代、素晴らしい縄文土器や生活の基盤を作り、自然信仰と祖霊信仰を日本全国で読み取ることができます。そのことは、そのような信仰を持つ同質の渡来人が来たのであろうことが想像できます。次の弥生時代になると水田や金属文明、大規模な共同集落がつくられます。この変化が紀元前のある時期に急激に起こっていることから新たな渡来人がやつて来たと思われます。そして古墳時代に入ります。巨大な土木技術や建築技術、鉄の技術を持った新たな渡来時がやつて来たのでしょうか。日本書紀に記述され考古学的に裏付けられるのはこの時代からです。「秦氏」、「漢氏」、「文氏」が登場し活躍するのもこの時代からになります。第二十五代雄略天皇以降の渡来人を「今来(いまき)の渡来人」といったのも、大量に渡来人が来て新しい技術を運んだものと思われれます。飛鳥・白鳳天平・時代と続く中で、多くの技術がもたらされ、平安時代になるときに基盤の目の平安京の様な街づくりはそれまでの時代にはない都の設計方式は特徴的です。

日本への渡来人のもう一つの特徴に、天皇制への従属、貢献があります。秦氏を中心として大きな集団であり高度な技術を持っているが、王権を奪おうとする渡来人はいませんでした。渡来人の中心にあった秦氏は、日本の神道や仏教に帰依し、天皇に対する屯倉制を支えます。将に日本に同化しようとしたことが見て取れます。日本が彼らにとつて安住の地であるかのように。この渡来人は遊牧の民であつたのかもしれない…。

【著者略歴】 井上正和(いのうえまさかず)

熊本大学工学部、九州大学大学院工学研究科卒業後、1971 年日本 IBM(株) 入社し SE 部門に配属。1992 年、中小・中堅企業コンサルティング部門を立ち上げ、責任者としてコンサルティングプロシージャの普及を図る。

2001 年に独立し、有限会社 情報戦略モデル研究所を設立。

経営戦略や IT 戦略の策定や構築に係る書籍出版、研修とコーチング支援、業務プロセス改善・改革に係る研修とコーチング支援などを多数手掛ける。2011 年 4 月 神奈川工科大学で「情報と文化」講座で古代史講義を担当した時から、記紀を始めとした古代史に取り組み、素人の観点から古代史研究を開始し、現在まで16年間、16シリーズ(各 5 回講座)を開発し、古代史の講座を横浜市地区センターを中心に、学者ではない素人にでも分かる古代史セミナーを開催し好評を得ている。今後オンラインでの全国展開を計画している。

古代史シリーズ7「秦氏と渡来人」

発行日 令和7年8月吉日 初版発行

著 者 井上 正和

発行所 有限会社 情報戦略モデル研究所

〒226-0006 横浜市緑区白山2-2-E-216

TEL:045-934-7254

URL: <http://www.ism-research.com/>

本書は、法令の定める場合を除き、複製・複写することはできません。

●本著の読者お問い合わせは下記を参照ください。

お問い合わせ: ism.researchbook@gmail.com

ISBN 978-4-9910882-8-5
C1021 1000E

発行: 情報戦略モデル研究所
価格: 本体価格 1,000 円 + 税

ISM
研

主な内容
はじめに 第1章 「渡来人とその時代背景」 第2章 「東漢氏と西文氏」 第3章 「秦氏の組織化」 第4章 「秦氏の生産活動」 第5章 「山背の秦氏」 おわりに